

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：34517

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K17660

研究課題名（和文）高齢初妊婦および高齢初産婦が体験する困りごとに関する支援方略の開発

研究課題名（英文）Development of support strategies to address concerns of first-time mothers of advanced age during pregnancy and childrearing

研究代表者

松井 菜摘（Matsui, Natsumi）

武庫川女子大学・看護学部・助教

研究者番号：90806803

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：高齢初産婦における妊娠期や育児期の体験をふまえて、育児不安や産後うつとその関連要因を明らかにすることを目的として、半構造化面接調査および自記式質問紙調査を行った。この結果、高齢初産婦は、妊娠期には、妊娠できたことに喜ぶ一方で、妊娠や出産、産後の育児に対する不安や葛藤を抱え、育児期には、無事に出産して見と過ごせる喜びを感じるとともに、理想と現実の間で揺れ動きながら、児の成長とともに集積する痛みや疲労等を経験していること、また産後の健康状態、育児生活の受容、特性的自己効力感が育児不安や産後うつにつながりやすいことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでに明らかにされていなかった、高齢初産婦の育児不安や産後うつの関連要因として、産後の健康状態、育児生活の受容、特性的自己効力感が示されたことは、育児不安や産後うつといった支援が必要な状況にある高齢初産婦への具体的な支援を検討することができるという点で意義があると考えられる。また、高齢初産婦の育児不安や産後うつを予防することにより、児童虐待予防に向けた高齢初産婦への「切れ目ない支援」のより具体的な展開につながることを期待できる。

研究成果の概要（英文）：Semi-structured interviews and self-administered questionnaires were conducted with first-time mothers of advanced age to clarify the contributions of experiences during pregnancy and childrearing to postpartum depression and anxiety about childrearing. During pregnancy, the women felt happy that they were able to become pregnant, but still had anxiety and conflicting thoughts about pregnancy, childbirth, and childrearing. During childrearing, they felt happy that they made it safely through childbirth and were able to spend time with their child, while also experiencing increasing distress and tiredness as their child grew, as they had mixed feelings about the gap between their ideal and reality. The mother's postpartum health, acceptance of the childrearing lifestyle, and generalized self-efficacy tended to be associated with parenting anxiety and postpartum depression.

研究分野：公衆衛生看護学分野

キーワード：高齢初産婦 育児不安 産後うつ

1. 研究開始当初の背景

近年の女性の社会進出や晩婚化に伴い、出産は高齢化の傾向であり、日本産科婦人科学会(2018)の定義である35歳以上の高齢出産の割合は28.1%と、この10年間で1.7倍、このうち初産は2.0倍、さらに40歳以上の初産では3.5倍と急速に増加している(厚生労働省, 2019a)。

高齢初産婦は、産後の体調不良や疲労、睡眠不足が生じやすい(藤岡ら, 2016; 森ら, 2016; 寅嶋ら, 2016)ことが報告されている。また、高齢初産婦であれば育児をともに行う夫が30歳代後半~40歳代と、他の年代と比較して就業時間が週60時間以上の割合が高い(内閣府, 2020)ことから、家事や育児に参加できる時間が少ないことが考えられる。「父親が育児参加することに対する考え」(中央調査社, 2012)を見ると、20歳代に比べて30~40歳代の父親は「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」が少なく、「父親は許す範囲内で、育児をすればよい」が多い。これらのことから高齢初産婦は、夫が仕事により多忙で、さらに育児に積極的になく、母親の負担が大きい場合も多いことが推測できる。さらに、高齢初産婦が生まれた1985年頃には出産時の母の平均年齢が28.6歳であった(厚生労働省, 2019a)ことから、高齢初産婦であればその親は65歳以上であることが多く、持病を抱えている等身体的な理由で支援を得ることが難しい場合や親に介護が必要なダブルケアの状況にある場合等が考えられる。

George(2005)は、一般的に女性は産後の疲労や痛み、授乳に対しては準備が不足していると述べている。高齢妊婦は、妊娠出産において母体の合併症、胎児の疾病や障害等のリスクが高い(笠井ら, 2012)ことから、高齢妊産婦は妊娠期をいかに乗り切るかに注力し、産後の生活に対する具体的なイメージが十分持てず、産後には思い描いていた生活と現実との違いに戸惑う場合も多いと考える。

以上より、高齢初産婦は育児期に困難な状況に直面している者が多いと考える。産後早期において、高齢初産婦は育児困難感やストレスを抱えやすいという報告(藤岡ら, 2014a, 2014b)もあることから、このような状況が重なることにより、その後も継続的に育児不安を感じている者が多い可能性がある。また、高齢出産(Matsumoto et al., 2011)や初産(Satoh et al., 2009)においては産後うつ病のリスクが高いとされ、育児不安や産後うつ病は児童虐待につながる恐れもある(厚生労働省, 2013)ため、支援が必要である。

35歳以上の母親による0か月児の虐待死は全体の約4割を占める(厚生労働省, 2019b)。平成29年度の虐待死亡事例58件に対し、児童虐待相談対応件数は133,778件(厚生労働省, 2019b)。1件の虐待事例には少なくとも5倍の援助を要する事例があるとの報告(佐藤, 2002)があることから、虐待死に至らなくても支援が必要な35歳以上の母親は相当数いると考える。このような状況にある高齢初産婦の育児不安や産後うつの要因を明らかにすることにより、児童虐待予防に向けた「切れ目ない支援」を実施するための具体的な示唆を得られると考える。

また、高齢妊産婦に関する研究の多くは、妊娠期から産後の1か月児健康診査を終える頃までの状況を調査したものである。しかし、産後2~3か月までの時期には育児不安(川井ら, 1994)や産後うつ病(鈴宮ら, 2008)が発生しやすいことが報告されていることから、1か月児健康診査の次に乳児全数を対象として行われる4か月児健康診査までの体験をふまえて、産後4か月時の育児不安や産後うつに関連する要因を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

- (1) 高齢初産婦における妊娠期および育児期の体験を明らかにすること。
- (2) 高齢初産婦における産後4か月時の育児不安や産後うつとその関連要因を明らかにすること。
- (3) 高齢初妊婦および高齢初産婦への具体的な支援方略を検討すること。

3. 研究の方法(図 研究の概要)

予備研究では、出産時に40歳以上であった初産婦5名に半構造化面接調査を実施した。調査内容は、基本属性や不妊治療歴の有無、妊娠経過、妊娠期および育児期の体験等とし、語られた内容をもとに質的記述的分析を行った。調査期間は、2018年7月から2018年11月である。

本研究では、A市の4か月児健康診査の対象となる児の母親977名を対象に、郵送による自記式質問紙調

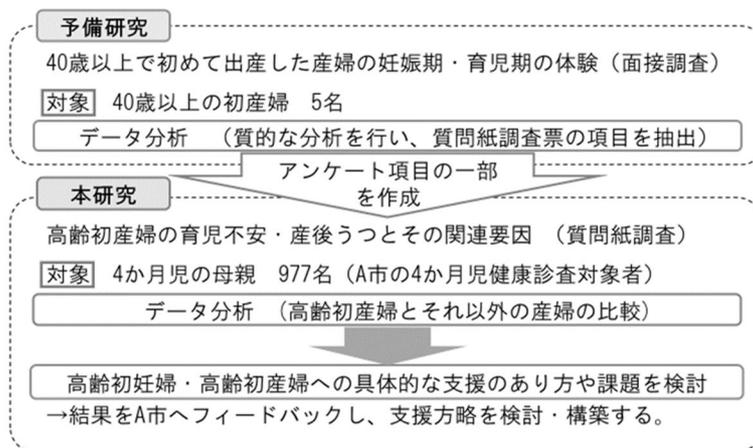


図 研究の概要

査を行った。調査内容は、基本属性、健康状態、サポート、妊娠期・育児期の体験（予備研究の結果から独自に作成した 20 項目）、育児支援チェックリスト（吉田, 2005）、赤ちゃんへの気持ち質問票（鈴宮ら, 2003）、特性的自己効力感尺度（成田ら, 1995）、牧野（1982）の育児不安尺度、岡野ら（1996）のエジンバラ産後うつ病質問票（Edinburgh Postnatal Depression Scale: EPDS）とした。分析は、記述統計量の算出、 χ^2 検定、育児不安と EPDS を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。調査期間は、2019 年 9 月から 12 月である。

武庫川女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 予備研究の結果

予備研究では、40 歳以上で初めて出産した産婦の体験として、妊娠期には【困難や不安を乗り越えて得た喜びや期待】【解消されない不安といかなる状況でも育てる覚悟】【妊娠前のように思い通りにいかないことへの葛藤】の 3 つのカテゴリー、育児期には【待ち望んでいた児と過ごせることへの喜び】【理想と現実の育児との間で揺れ動く思い】【休みなく続く育児の中で集積する苦痛と疲労感】の 3 つのカテゴリーが抽出された。

(2) 本研究の結果 : 高齢産婦における育児不安と産後うつ

予備研究において明らかになった高齢初産婦の妊娠期および育児期の体験をふまえて質問紙調査票を作成し、本研究を実施した。

本研究では、440 名から回答が得られ（回収率 45.0%）、年齢の記載がない 3 名を除く 437 名を有効回答（有効回答率 44.7%）とした。

母親の平均年齢は 33.1±4.55 歳、35 歳以上の母親は 171 名（39.1%）であった。育児不安尺度の平均得点は 33.1±4.90 点、育児不安高値群は、35 歳以上の母親では 37 名（22.2%）であり、35 歳未満と比較して有意な差は見られなかった。EPDS の平均得点は 4.1±3.73 点、産後うつのリスクが高いとされる EPDS9 点以上の割合は、35 歳以上の母親では 18 名（10.6%）であり、35 歳未満と比較して有意な差は見られなかった。

35 歳以上の母親において、育児不安が高いことは、経産、睡眠による休養がとれていない、心理的・精神的な問題でのカウンセラーや医師等への相談経験がある、赤ちゃんのためにしないといけなことがあるのにおろおろしてどうしていいかわからない時がある、赤ちゃんをあまり身近に感じられないことと関連していた。また、35 歳以上の母親において、EPDS が 9 点以上であることは、産後に十分なサポートが得られるか妊娠中を通して不安があった、心理的・精神的な問題でのカウンセラーや医師等への相談経験がある、赤ちゃんの泣きに対する困惑感があることと関連していた。

35 歳以上の母親の育児不安や産後うつに関連していた項目について、初産経産別の該当割合を比較した結果、35 歳以上初産の母親の該当割合が高かったものは、睡眠による休養がとれていない（30.6%）、赤ちゃんの泣きに対する困惑感がある（75.5%）の 2 項目であった。

(3) 本研究の結果 : 高齢初産婦の特性および育児不安と産後うつ

次に、初産の母親 207 名を対象として分析を行った。初産の母親の平均年齢は 31.4±4.60 歳、このうち 35 歳以上の母親は 49 名（23.7%）であった。

育児不安尺度の平均得点は 32.2±4.26 点、育児不安高値群は、35 歳以上の母親では 14 名（29.8%）であり、35 歳未満と比較して有意な差は見られなかった。EPDS の平均得点は 4.3±3.52 点、EPDS9 点以上は、35 歳以上の母親では 4 名（8.2%）であり、35 歳未満と比較して有意な差は見られなかった。

35 歳以上では、不妊治療経験がある母親や義父母の定期的な協力が得られない母親が、35 歳未満よりも有意に多かった。また、育児期の体験について、35 歳以上では、自分のペースで生活ができないと感じる母親、体力的に辛いと感じることが多い母親が、35 歳未満よりも有意に多かった。

初産の母親において、育児不安が高いことは、睡眠による休養がとれていない、自分のペースで生活ができないと感じる、赤ちゃんのためにしないといけなことがあるのにおろおろしてどうしていいかわからない時がある、特性的自己効力感が低値群であることと関連していた。また、EPDS が 9 点以上であることは、定期的な通院や入院が必要な子どもの疾患がある、外出など生活に制限があることが子どものためであっても納得できない、赤ちゃんのためにしないといけなことがあるのにおろおろしてどうしていいかわからない時があることと関連していた。

35 歳以上初産の母親においては、睡眠時間が 6 時間未満、睡眠による休養がとれていない、思っていたよりも育児は大変である母親は、そうでない母親に比べ、育児不安高値群の割合が高かった。さらに、特性的自己効力感が低値群の母親は、高値群の母親に比べ、EPDS9 点以上の割合が高かった。

(4) 考察

高齢初産婦の特性として、不妊治療の経験がある、自分のペースで生活ができないと感じる、体力的に辛いと感じることが多い人の割合が高いことが示唆された。この背景として、年齢によ

る妊娠率の低下 (Hull et al., 1985)、流産や切迫早産、妊娠高血圧症候群といった母体側のリスクが高いこと (笠井ら, 2012)、加齢とともに有訴者率が高くなること (厚生労働省, 2017) 等が考えられる。また、特に高齢初産婦では、これまで長年生活してきた大人のみの生活から、子ども中心の生活に切り替えて調整する中で、思いどおりにいかないもどかしさを感じていることも考えられる。

高齢初産婦の育児不安や産後うつについては、その他の初産婦と比べて有意な差は見られなかった。産後 4 か月時においては、高齢初産婦の育児不安や産後うつ傾向が高いとは言えず、初産婦全体の傾向と同様である可能性がある。

高齢初産婦では、産後の健康状態、育児生活の受容、特性的自己効力感が育児不安や産後うつにつながりやすい要因であることが考えられる。このことから、高齢初産婦に対しては、新生児訪問や 4 か月児健康診査において、子どもの成長発達や保護者の育児に関する支援のみならず、母親の健康状態を十分に把握することや、出産医療機関と居住地の保健師が連携しながら、必要に応じて産後早期から家族のサポートや社会資源の活用ができるよう支援することが重要である。また、妊娠期からの予防的な関わりとして、妊娠届出時の面接や両親学級等において、妊娠中から産後の生活を具体的にイメージし、夫婦で育児について話し合うことの重要性を伝える必要があると考える。

<引用文献>

中央調査社. (2012). 父親の育児参加に関する世論調査.

<http://www.crs.or.jp/backno/No659/6592.htm>

藤岡奈美, 伊藤由香里, 間倉千明, 吉武いづみ, 団田利恵, 佐藤李衣子, 奥村尚子, 山田真弓. (2016). 初産婦の出産後 1 か月間における睡眠が産後うつ傾向に及ぼす影響 - 適応年齢褥婦と高齢褥婦を比較し, 高齢褥婦の特性を検証する -. 母性衛生, 57(2), 385-392.

藤岡奈美, 亀崎明子, 河本恵理, 塩道敦子, 坪井陽子, 藤井陽子. (2014a). 出産後 5 日間のストレス詳細とストレス反応の経時的変化 - 高齢初産婦と適応年齢初産婦との比較検討. 母性衛生, 55(1), 78-85.

藤岡奈美, 亀崎明子, 河本恵理, 塩道敦子, 坪井陽子, 藤井陽子. (2014b). 初産婦が産褥早期に育児困難感を抱く要因 - 出産後から 5 日間の短縮縦断調査より -. 母性衛生, 54(4), 563-570.

George, L. (2005). Lack of preparedness—Experience of First-Time Mothers. *MCN: The American Journal of Maternal/Child Nursing*, 30(4), 251-255.

Hull, M. G., Glazener, C. M., Kelly, N. J., Conway, D. I., Foster, P. A., Hinton, R. A., Coulson, C., Lambert, P. A., Watt, E. M., & Desai, K. M. (1985). Population study of causes, treatment, and outcome of infertility. *British Medical Journal*, 291, 1693-1697.

笠井靖代, 尾崎倫子, 山田学, 板岡奈央, 宮内彰人, 石井康夫, 安藤一道, 杉本充弘. (2012). 年齢因子は分娩に影響するか. *日本周産期・新生児医学会雑誌*, 48(3), 585-594.

川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次欽也. (1994). 育児不安に関する基礎的検討. *日本総合愛育研究所紀要*, 30, 27-39.

厚生労働省. (2013). 子ども虐待対応の手引き (平成 25 年 8 月 改正版). https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/130823-01.html

厚生労働省. (2017a). 平成 28 年国民生活基礎調査の概況.

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>

厚生労働省. (2019a). 平成 30 年 (2018) 人口動態統計 (確定数) の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei18/index.html>

厚生労働省. (2019b). 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について (第 15 次報告). https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000190801_00003.html

牧野カツコ. (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と <育児不安>. *家庭教育研究所紀要*, 3, 34-56.

Matsumoto, K., Tsuchiya, K. J., Itoh, H., Kanayama, N., Suda, S., Matsuzaki, H., Iwata, Y., Suzuki, K., Nakamura, K., Mori, N., & Takei, N. (2011). Age-specific 3-month cumulative incidence of postpartum depression: The Hamamatsu Birth Cohort (HBC) Study. *Journal of Affective Disorders*, 133(3), 607-610.

森恵美, 前原邦江, 岩田裕子, 土屋雅子, 坂上明子, 小澤治美, 青木恭子, 森田亜希子, 望月良美, 前川智子. (2016). 分娩施設退院前の高年初産婦の身体的心理社会的健康状態: 年齢・初産別 4 群比較から. *母性衛生*, 56(4), 558-566.

内閣府. (2020). 令和 2 年版少子化社会対策白書全体版. 内閣府.

成田健一, 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 長田由紀子. (1995). 特性的自己効力感尺度の検討 - 生涯発達の利用の可能性を探る -. *教育心理学研究*, 43(3), 306-314.

日本産科婦人科学会. (2018). 産科婦人科用語集・用語解説集改訂第 4 版. 日本産科婦人科学

会事務局。

岡野禎治, 村田真理子, 増地聡子, 玉木聡司, 野村純一, 宮岡等, 北村俊則. (1996). 日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票(EPDS)の信頼性と妥当性. 精神科診断学, 7(4), 525-533.

Satoh, A., Kitamiya, C., Kudoh, H., Watanabe, M., Menzawa, K., & Sasaki, H. (2009). Factors associated with late post-partum depression in Japan . Japan Journal of Nursing Science, 6(1), 27-36 .

- ②①佐藤拓代. (2002). 子ども虐待予防のための保健師活動マニュアル. 厚生科学研究「地域保健における子ども虐待の予防・早期発見・援助に係る研究」平成 13 年度研究報告書.
- ②②鈴宮寛子, 山下洋, 吉田敬子. (2003). 出産後の母親にみられる抑うつ感情とボンディング障害. 精神科診断学, 14(1), 49-57.
- ②③鈴宮寛子, 山下洋, 上別府圭子, 吉田敬子. (2008). 事例とミニレクチャーで学ぶ産後の母親のメンタルヘルス支援活動 企画・立ち上げから実践まで. 母子保健事業団.
- ②④寅嶋静香, 遠藤紀美恵, 澤田優美. (2016). 産後 2 ~ 9 か月にある女性の身体的健康状態における実態調査第一報 ~ 高齢出産群と他年齢出産群との比較から ~. 母性衛生, 57(2), 297-304.
- ②⑤吉田敬子(監修). (2005). 産後の母親と家族のメンタルヘルス. 母子保健事業団.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松井菜摘、和泉京子、金谷志子、岩佐真也	4. 巻 6
2. 論文標題 4か月児をもつ35歳以上の母親における育児不安とその関連要因 - 35歳未満の母親との比較 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武庫川女子大学看護学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14993/00002050	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松井菜摘、和泉京子、岩佐真也	4. 巻 62(1)
2. 論文標題 40歳以上で初めて出産した女性の妊娠期・育児期の体験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 母性衛生	6. 最初と最後の頁 126-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松井菜摘、和泉京子、岩佐真也
2. 発表標題 40歳以上で初めて出産した産婦の妊娠期における心情
3. 学会等名 第78回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Natsumi Matsui, Kyoko Izumi, Maya Iwasa, Chieko Fujiwara
2. 発表標題 Child-Rearing Experiences of Women Who Gave Birth for the First Time in Their 40s
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------